

8月18日(日) 第1室(総合教育棟202)【ライティング】

時間帯	発表者	発表タイトル	発表要旨
⑧ 9:30~9:55	生田 裕二(千葉県立千葉南高等学校)	日本人英語学習者の英作文における後置修飾構造の使用	日本人英語学習者が直面する文法的困難のひとつに、後置修飾(postmodification)の存在を挙げる研究は多い(e.g. Hashimoto, 2005)。一般的に日本語においては後置修飾による統語構造は殆ど存在しないとされており、それは第2言語習得を困難にしている要因の1つであることは否めない。本研究では、「高校生と大学生の学習者が産出する後置修飾にどのような傾向があるのか」、また「そのような結果を生み出す指導背景」、並びに「この文法項目に対する学習者の意識」を明確にすることを目的とした。さらに英語母語話者の産出文との差異にも注目しその感覚の差異を明らかにした、今回の調査結果では、日本人英語学習者が産出する後置修飾には関係詞節への依存が顕著に見られ、分詞句や前置詞句の使用が予想以上に少ないことが判明した。この結果を踏まえて今後の英作文指導への教育的示唆を目指したい。
⑨ 10:00~10:25	藤森 敦之(静岡県立大学) James Herbach(静岡県立大学)	Students' self-directed portfolio for academic writing	There are a variety of detailed Can-Do lists although English instructors often have trouble with how to make use of such lists in class and evaluation. The purpose of this study is to select evaluation criteria from linguistic viewpoints, develop a portfolio including them, and apply this to academic writing. The essay writing portfolio was concerned with three fundamental aspects: organization, vocabulary and grammar. It was used in an academic English course to examine its effectiveness for improving writing skills. Ten students whose CEFR proficiency was at the B1 level participated in three practical sessions where they revised their own essays based on explicit instructions. Their essays were evaluated by a trained rater. In the first two sessions, the participants received explicit instructions regarding organization and grammar and their average score was 2.5 of 5.0 in TOEFL writing. In the third session, students focused on adding supporting materials to their writing. Through this step by step process students were able to improve their writing abilities in reference to the TOEFL test. Key to this improvement was their self-evaluations which were critical in directing them to which features of their academic essay writing skills needed to be addressed and modified.
⑩ 10:30~10:55	佐々木 大和(筑波大学大学院)	自動英文解析ツールと評価者による英作文評価の関係性一算出された言語的特徴を基にー	教師にとって英作文の採点は時間と労力の要する作業である。そのため、近年、英作文の自動採点が注目を浴びてきている。母語話者を対象とした研究では、リーディング研究で使用されている自動英文解析ツールが英作文採点に有用であると明らかになっているが、学習者を対象とした研究は少ない。本研究では、自動英文解析ツールであるCoh-MetrixとText Inspectorを用いて、英作文の言語的特徴を数値化し、評価者による採点との関係性を検証した。実験では、日本人大学生に英作文課題を課し、自動英文解析ツールを用いてその英作文を分析した。さらに、評価者が英作文の採点を行った。分析の結果、自動英文解析ツールで算出された英作文の言語的特徴と評価者による採点の関係について示唆が得られた。本発表では、この結果を考察し、自動英文解析ツールの英作文採点への利用可能性について議論する。
⑪ 11:00~11:25	長橋 雅俊(聖徳大学)	ピア・アセスメントを導入したライティング教室における評価基準の開発と指導効果の検証	日本英語検定協会(以下STEP)は、2016年より実用英語検定2級で新方式ライティング試験を導入し、翌年には準2級へ対象を拡げてきた。この作文問題に関する評価方法の詳細は明らかではなく、受験生や現場教師の多くが対策や指導に苦慮していると思われる。本研究では英語専攻の日本人大学生12名が受講したライティング科目で2級の想定問題を用い、タスクへの熟考や作文への気づきを促すねらいでピア活動に着手した。当初の活動では、STEPが公表しているタスク要件や評価観点から9つの基準を考察し、学生同士の作文評価に導入した。このデータをラッシュ・モデル分析に諮り、初回の評価信頼性と基準の妥当性として検証した。また後続の活動に向け、検証結果を踏まえた評価基準の改訂を試み、新たな作文の推敲とピア活動を繰り返した。再分析の結果からは概ね信頼性の向上が確認され、後々の学生自身が書いた作文にも改善の兆しが見られた。
⑫ 11:30~11:55			

8月18日(日) 第2室(総合教育棟205)【指導法】

時間帯	発表者	発表タイトル	発表要旨
⑧ 9:30~9:55	佐藤 大樹(信州大学教育学部附属長野中学校)	中学校における領域統合型の言語活動を通して、考えや感想をやり取りすることの指導	中学3年生を対象に読んだことに基づいて、考えや感想をやり取りする領域統合の言語活動の実践を報告するものである。研究課題は、生徒がどのように主体的・対話的に学び、深い学びを得ていくのかを明らかにすることであった。4月~5月に、「Messages from Hiroshima」という単元を実施した。本単元の中で、広島原爆に関する二つの物語(「The Story of Sadako」(New Crown,三省堂)と「A Mother's Lullaby」(New Horizon,東京書籍)を読んだ後、共通点や相違点に着目させ、外国人の友へ紹介したい物語について、自分の体験や友の考えをかかわらずながら、3人グループで互いの考えを伝え合わせた。領域統合型の話すこと(やり取り)の指導の成果と課題を考察する。本発表は、酒井・佐藤・菊原・木下(2019)の継続研究である。
⑨ 10:00~10:25	久山 慎也(広島県立広島井口高等学校)	英文要約における高校生のつまずきとその改善に向けた指導	本発表は久山(2018)で行った高校生対象の英文要約指導を土台として、実践の結果明らかとなった課題を改善すべく、次年度に他のクラスで行った活動の報告である。対象となった生徒は3年生1クラス39名で、指導においては日本語による要約文作成、英語でのテキスト・マッピング、ルーブリックを提示した上での英文要約作成を行った。なお、英文要約では1パラグラフを1文で縮約する活動を通じて、複写と削除の方略からの脱却を目指した。期間は2018年の9月~12月で、指導はコミュニケーション英語Ⅲの授業を使用して9回行っている。事前・事後テストにおいて生徒が書いた英文要約を、内容(4点)・言い換え(4点)・言語使用(4点)の観点から採点した結果、合計得点の平均値は7.91から8.74に上昇した。この差について両側検定のt検定で検討したところ、 $t(34)=-2.25$ 、 $p=.03$ となり5%水準で有意であった。
⑩ 10:30~10:55	今井 典子(高知大学) 杉浦 理恵(東海大学) 高島 英幸(東京外国語大学)	定着を促進し学習意欲を高めるディクトグロス-Jの効果的活用	Dictogloss-Jは、特定の文法構造に焦点化し定着を図る「タスク(focused task)」である。Dictogloss(Wajnryb,1990)を日本人初級学習者に適うように、テキスト内容、所要時間、手順を改善している。特長は、ペアによるテキストの再構成の作業で、テキストに仕込まれた特定の文法構造についてメタ言語で話し合う languaging(Swain,2006)にある。対話を通して、当該文法構造の正確かつ適切な使用法に気づき、さらに、明示的フィードバックを受けることで定着が促進され、協働活動により学習動機が向上することが明らかになっている。発表では、Dictogloss-Jの有効性を踏まえ、効果的な指導法として組み込むために、Larsen-Freemanが謳う form, meaning, use(使われ方)を考慮した導入方法やフィードバックのポイントを議論する。
⑪ 11:00~11:25	栄利 滋人(仙台市立国見小学校)	質問と答えの対でインプットする小学校英語 ー音声インプットの教材開発を通してー	小学校外国語の授業を成立させるツールの一つとして、ネイティブ音声の教材が大切だと考える。授業で、「聞きたい、尋ねたい、伝えたい」という気持ちを持たせた状況・場面設定で、ネイティブ音声をインプットすることがやがてアウトプットにつながっていくと考えている。小学校高学年のアクティビティでは、単語レベルで音声インプットを行うよりも、実際の会話のやりとりで使う「質問と答え」になる対の英語表現で音声インプットを最初から行った方が、リスニングや会話のやりとりに対する「聞き取れる感」「話せる感」の向上が期待できるのではないかと考え、多量の音声インプットを可能にするアクティビティ開発と授業実践でその効果を明らかにする。
⑫ 11:30~11:55	中道 有美(Hokkaido University) Lin Ivy Chu-Hui(Hokkai Gakuen University)	Develop EFL Learners' Metacognitive Strategies in Speaking Activities	It is understood that Japanese EFL learners have a hard time acquiring English-speaking skills. In fact, many of the students the presenter teaches at university list speaking skill as the main skill they want to improve upon. Welden (1998) found learners needed guidance in improving and expanding their knowledge about how they learned and suggests that teachers should aim to help language learners develop a more reflective and self-directed approach to learning. This study investigated the effects of metacognitive strategy training for improving speaking skills in university-level language learners. Participants (N = 172) were sampled from English classes from one national university and three private universities in Japan where the presenter and co-author work as English instructors. The participants are non-English major students ranging from freshmen to Ph.D. candidates. The experimental group (n = 126) received instruction for self-reflection which included metacognitive strategy, so that they could record reflections of how they learned at the end of each class. The control group (n = 46) recorded the reflections independent of pedagogical intervention. The same speaking tasks were administered to students of both the experimental and control groups in class. The comments on the reflection sheets were categorized by our rubrics and compared. The results provide insight on how EFL learners reflected upon their metacognitive knowledge and subsequently, potential pedagogical implications on giving metacognitive strategy instructions in the EFL classrooms.

8月18日(日) 第3室(総合教育棟206)【指導法】

時間帯	発表者	発表タイトル	発表要旨
⑧ 9:30~9:55	高橋 悠貴(東京学芸大学大学院)	日本人英語学習者のリーディング力およびリスニング力への速読訓練の効果ー読み力から聞く力への技能間転移に焦点を当ててー	本研究では、学校現場での効果的かつ効率的なリーディング力およびリスニング力向上の指導法を探ることを目的とした。そこで、リーディングとリスニングの意味処理のプロセスが共通であることに基づき、速読訓練がリーディング力の伸長だけでなく、リスニング力をも促進するという仮説を立て、検証した。高校生57名を対象に、英語表現の授業の冒頭で速読訓練を週2回・4週間に渡り行った。毎回の速読訓練において、生徒は設定された制限時間内に100-150語程度の文章を2つずつ読んだ。実施した速読訓練の効果を検証するために、訓練の前後でリーディングにおける読みの速度と、リーディングとリスニングの理解度を測定し、比較した。その結果、リーディングにおいては読みの速度が、リスニングにおいては理解度が有意に向上した。そのため速読訓練はリーディングの速度向上だけでなく、リスニング力促進にも寄与する活動であることが示唆された。
⑨ 10:00~10:25	柴山 純(特定非営利活動法人楽しく伝える・キャリアをつくるネットワーク)山本 由紀子(特定非営利活動法人楽しく伝える・キャリアをつくるネットワーク)	小中学生の英語学習意欲醸成に向けた試みと考察ー英会話の連続性を支える表現の実践ー	英語の運用において、文法力や語彙の多寡に関わらず、単語中心の発話や1往復に留まる応答、消極的沈黙など、小中学生が知識の運用に自信を持ってない状態は少なくない。そうした状態を改善する学習体験をめざし、われわれは、同一地域で生活する英語学習歴が異なる小中学生の集団に対し、2時間のプログラム中に「2分間連続応答」に挑戦する学習体験を提供した。設計にあたっては会話の応答構造に着目し、一連の工程(相手の発話を受けとめてから自らの発話を返す)を支える言語・非言語表現を取り入れた。分析では、会話の連続性を支える言語・非言語表現の学習体験、および、その体験に対する自己評価が、英語の学習意欲に影響するかを検討した。さらにアクティブラーニングの視点にたち、学習歴の異なる子ども同士・英語指導者や国際交流員、本発表者らとの協働を基本に、即興性と遊戯性のあるワークを重ねることで、学習サイクルの効果についても考察した。
⑩ 10:30~10:55	佐野 愛子(札幌国際大学)	Creating a translanguaging space in an English classroom in Japan	The rapid globalisation of both the economy and society has impacted our teaching environment, the most obvious change being the influx of international students into our classrooms. With the biggest proportion of incoming international students coming from Asia, English instructors in Japan today are facing a situation in which various types of second language speakers of English are studying side by side. Seeing such change in the classroom as a positive opportunity rather than a problem to be overcome, the author created a course in which students made use of their first languages as a linguistic resource for their learning, in other words, creating a translanguaging spaces in the classroom. More specifically, the course entitled "English through Movies" had discrimination as its main theme. The theme was introduced first by the instructor, followed by a class discussion on a movie related to the theme. The students were then asked to introduce a movie made in their first language to the whole class through English, the lingua franca of the class. This presentation reports how the course was implemented in detail, discussing how such an activity helped students not only to make presentations with depth but also helped the students to foster a positive identity.
⑪ 11:00~11:25	田所 貴大(東京学芸大学連合大学院)	CLILの枠組みに関する研究ー4つのCに着目してー	CLILの特徴として、4つのC(4Cs)がある。4Csとは、Content(科目やトピック)、Communication(言語知識や言語スキル)、Cognition(さまざまなレベルの思考力)、Community/Culture(共同学習、異文化理解、地球市民意識)である(和泉, 2016)。また、内容と言語の両方に重きをおくことから、指導形態は、教科教員、外国語教員、もしくは両者によるチームティーチングとなる。本研究は、データベース検索により論文を収集し、論文で報告されているCLILの実践における4Csの記述の有無、それぞれのCの具体的要素、そして指導形態を分析した。4つのCが、どのように取り入れられており、論文の中でどのように報告されているのかを明らかにする。さらには、実践者や実践形態を調査するとともに、CLILの動向と実態を掘り、CLIL実践の方向性を模索する。
⑫ 11:30~11:55	青木 重憲(筑波大学大学院)	口頭再話と筆記再生が内容理解に与える影響ーテキストジャンルに焦点を当ててー	外国語教育では対話力や発信力が求められ、技能統合的活動の重要性が増している。その中で再生課題は複数の技能を統合した活動で、本文理解を深め定着させる有効な活動の一つである。再生課題には主に、読んだ内容を思い出せる限り想起し自分の言葉で再生する口頭再話と、書き出して再生する筆記再生がある。口頭再話は先行知識とテキスト情報から推測を働かせる(Morrow, 1986)ため内容理解が深まり、筆記再生は説明文の再構築に積極的な役割を果たす(Moss, et al. 1997)と言われる。だが、どちらがより本文理解に適しているかは意見が分かれている。さらに、物語文と説明文での各再生活動の有効性の違いに関する研究も不十分である。本研究は日本人中学生約150名を対象に、再生活動やテキストジャンルの違いによる本文理解へ与える影響を調査した。その結果に基づき、授業での再話・再生活動の進め方について提案する。

8月18日(日) 第4室(総合教育棟207)【指導法/スピーキング】

時間帯	発表者	発表タイトル	発表要旨
⑧ 9:30~9:55	安木 真一(京都外国語大学・短期大学)	音読を授業とリンクした自主学習において促進させる手法の考察	本発表においては筆者のこれまでの音読指導に関する実践を、安木(2019)を元に概観し、現在までの筆者の音読を中心とした指導の中での問題点について考察する。その中で特に「自主学習における音読を十分実施するためのシステム」が確立されていないことに焦点を当てる。授業において様々な音読活動を実施しても、十分な回数がなされるとは言えず、学習者が自宅などでの授業外で音読をし、またそれを教師がチェックするためのシステムが必要になる。家庭学習における音読を促進するために、学生がwebアプリQulmeeを使用して、家庭で実施した音読の音声をスマートフォンやパソコンから教師に送信し、それに対して教師がフィードバックを与えた大学での筆者の実践例を紹介する。その実践の長所と短所に加えて、学習者の家庭での音読を促進するための方策について、アプリ使用以外の手法も考えながら今後の方向性を含めて考察する。
⑨ 10:00~10:25	大田 悦子(東洋大学)	高校生の英作文に見る文法学習の在り方—文法を「教える」とは—	この研究の目的は、英作文における文法使用の変化を検証し、高校の文法指導の在り方を再考することである。中学生の文法発達に関して、中学終了時に使えるようになっていると判断できる文法項目は主に中1での学習項目(村越,2013)、中3で学習する関係代名詞が英作文で出現するのは高3項(村越,2012)という報告がある。これらは、学習し「使える」までかなりの「時差」が存在するという現実を示す。白畑(2015)は大学生対象の実験を経て、文法の誤りには教師が何度指摘してもなかなか修正されないものが存在し、学習者の習熟レベルを超える説明は学習効果が薄いと論じている。本研究に協力した青森県内の公立高校(の対象学年:3年)では、文法の明示的解説はほぼ行わないという指導を行ってきた。そのような授業を受けた学習者の1年次と2年次の外部模試での英作文を複数の観点から比較し「文法を教える」とは何かを考える。
⑩ 10:30~10:55	太田 洋(東京家政大学) 前田 宏美(東京都葛飾区立四ツ木中学校)	中学校英語指導における誤り訂正の現状	この研究は、中学校における教室での英語指導において、生徒の発話に対する教師による誤り訂正(Corrective Feedback)の現状を明らかにすることを目的とする。文部科学省は学習指導要領解説(平成29年7月)において、「授業は英語で行うことを基本とする」とし、中学校英語指導における教師と生徒、あるいは生徒同士の話すことによるやり取りを求めている。教師と生徒のやりとりの中で、どのような誤り訂正がどの程度行われているのであろうか。そこで公立中学校の英語授業を分析し、教師と学習者によるやり取り中に誤り訂正が見られる授業を選び、どの種類の誤り訂正が行われたのか、どの程度行われたのかを分析した。本研究の結果、その中で見えた傾向等も発表する。
⑪ 11:00~11:25	Newbery-Payton Laurence(Tokyo University of Foreign Studies) Mochizuki Keiko(Tokyo University of Foreign Studies) Kanazawa Atsuko(Tokushima Prefectural Joto Senior High School)	Longitudinal Research on English Speaking Education using ICT	We present findings from a six month period of an ongoing longitudinal study into the effects of long distance English speaking education using ICT. Students at a high school in Tokushima Prefecture are currently participating in long distance one-on-one English classes via video link with teachers in the Philippines. Emphasis is placed on face-to-face interaction and free conversation, in an attempt to maximize students' speaking opportunities and boost their interactive and productive language skills. Lesson conditions are designed to replicate to the greatest possible extent conversation in person, and support for students is also provided using a dedicated online platform, where they can access resources, leave feedback on lessons and view supplementary audiovisual materials produced by the research team and featuring foreign exchange students studying at university in Japan. High school students' performances in such an interactive environment, and any changes observed in their productive language skills throughout the course of the study, are compared with their test scores for computer-assisted speaking exams without direct human interaction.
⑫ 11:30~11:55	福田 昇(長岡工業高等専門学校)	プレゼンテーション活動に出現する自発的ビートの研究	本研究は実践的発話表現に伴って生じる自発的ビート表現から思考・判断を遡及していく研究である。自発的ビートは誰の目から見ても明確に分かる現象でありながら、英語教育との関連を含めて調査されて来なかった。それは、学習者主体の能動的学修が開発途上にあるからである。本研究の目的は、学習者自らが主体的に行う発話活動の学習成果を経時的に追求め、自発的ビートが発話力を高めるかを明らかにするものである。不慣れな英語を用いて発表するプレゼン活動では、多くの学生に自発的ビートが出現する。つまり、自発的ビートは言語活動を円滑にしたいために学習者が無意識に生じるしぐさということになる。自発的ビートが初期英語学習者の発話に有意に働くならば、自発的ビートを積極的に活用することで今の時代が最も求めている発話型英語力を向上させるために必要な基礎研究となる。

8月18日(日) 第5室(総合教育棟208)【発音】

時間帯	発表者	発表タイトル	発表要旨
⑧ 9:30~9:55	飯村 英樹(群馬県立女子大学) 高波 幸代(東洋大学)	「模倣音読」活動におけるパフォーマンスの変化	本研究は飯村・高波(2016)および高波&飯村(2019)の追研究である。これまでの研究では主に「模倣音読」活動がスピーキング能力に与える影響や活動による学習者の意識を検証してきた。本研究では「模倣音読」活動におけるパフォーマンスそのものの変化に焦点を当てる。約2か月にわたり授業の一部を用いて、モデル音声に完全にコピーするという「模倣音読」活動を行った。参加者は日本大学生12名であった。活動期間のうち、合計4回録音した音声を提出させ、活動の最後には発表会を設けた。評価の観点として、(a)発音・強勢、(b)抑揚、(c)速度、を設定した。また活動への取り組み状況や音読への意識、効果の実感などを調査するために、アンケートを実施した。分析の結果、パフォーマンスの向上は観点により異なることが示唆された。
⑨ 10:00~10:25	磯田 貴道(立命館大学) 大和 知史(神戸大学)	発音指導と他技能との統合—thought groupの指導を通して—	英語コミュニケーション能力の育成における発音指導の重要性が指摘され、発音指導が発音を良くするための指導にとどまらず、他技能の指導と統合されることが求められている。しかし現状は、そのような統合は進んでいないと言わざるを得ない。統合が進むためには、発音指導がいかに他技能の指導と関連し、発音指導をすることで英語力の伸長に寄与できることを示さなければならない。本発表では、発音指導と他技能を結ぶ接点としてthought groupの指導が重要であると主張する。thought groupは意味的・統語的なまとまりで、発話の区切りであるが、発音指導において優先順位の高い項目であるだけでなく、リスニングやリーディングのプロセス、文法処理など、他技能を伸ばす指導に直結することを、複数の研究領域における理論を踏まえて考察する。合わせて、具体的な指導方法の提案も行う。
⑩ 10:30~10:55	高山 芳樹(東京学芸大学)	大学生の日本人英語学習者の音節認識能力を探る—英単語の「音節の数」をいかに正確に数えられるのか—	本研究の目的は、大学生の日本人英語学習者の音節認識能力のうち、英単語を聞いて「音節の数」をいかに正確に数えることができるかを明らかにすることである。また、同じ大学生でも1年以上ESL環境で英語に触れてきた経験を持つ者(ESL経験者)と、その経験を持たない者とその能力に違いがあるかどうかを確認する。被験者は中高の英語の教員免許取得のために「中等英語科教育法」の授業を履修している大学生68名で、このうち7名がESL経験者である。被験者はアメリカ人英語母語話者によって読み上げられた38個の英単語を聞いて、その音節数を1~8の数字から選ぶよう指示された。分析の結果、ESL非経験者61名の正答率は61.8%、ESL経験者7名の正答率は77.1%であった。また、ESL非経験者61名の音節認識能力とTOEICリスニングパート相当得点との間には、統計的に有意な弱い相関($r=.36$)があることがわかった。
⑪ 11:00~11:25	阿部 秀樹(鶴岡工業高等専門学校)	The effect of self-regulated learning on comprehensibility in L2 pronunciation: A structural equation modelling study	The interrelationships of critical factors of individual learner differences involved in the development of comprehensibility in L2 pronunciation have been attracting scholarly attention in the last decade, with some investigating the role of motivation in the learning process and others exploring learning strategies as a significant predictor of L2 pronunciation development. Whilst it is critical that we understand why learners learn pronunciation and how they actually do so, it is probably even more important to explore how these 'why' and 'how' factors work in tandem in achieving comprehensibility in L2 pronunciation. Drawing upon the theoretical framework of self-regulated learning (SRL), this study examines the significant possibility that uncovers the mechanisms through which L2 learners regulate their self-regulated capacity. Accordingly, two major research questions have been formulated:RQ1: What structural model best represents the relation between self-regulated learning and L2 comprehensibility?RQ2: Do the EFL pronunciation strategies for SRL predict the comprehensibility of L2 pronunciation?The data of 103 participants are collected via a questionnaire, assessing learners' SRL towards L2 English pronunciation learning, and an examination of L2 pronunciation comprehensibility, both of which are submitted to structural equation modeling (SEM). The fit indices indicated a good fit to the data, $\chi^2/df = 1.11$, $p = .256$, GFI = .91, CFI = .98, TLI = .98, RMSEA = .032 [.00-.068], SRMR = .596. The empirical evidence lends preliminary support that pronunciation learning strategies play a mediating role in the effect of motivation on the achievement of comprehensibility.
⑫ 11:30~11:55			

8月18日(日) 第6室(総合教育棟2階大会議室)【動機づけ】

時間帯	発表者	発表タイトル	発表要旨
⑧ 9:30~9:55	佐藤 麻耶(北海道教育大学大学院生) 菅原 健太(北海道教育大学)	日本人英語学習者の動機づけの維持とポジティブな感情	第二言語(L2)習得における動機づけ研究では、自己の視点から、ポジティブな感情でL2学習に没頭し続けることができる仕組みの理解に向けた研究が、近年盛んに行われている(Boo et al., 2015)。これらの研究は、英語学習においてネガティブな感情や動機づけの減退が問題視される日本人英語学習者を対象とした場合、特に有益であると思われるが、まだ研究の初期段階である。本研究では、ポジティブな感情が起こる仕組みを説明する自己決定理論(Ryan & Deci, 2017)に加え、近年、エンゲージメント(engagement)の概念を用いて再概念化が進むL2動機づけ自己システム(Dörnyei, 2019)をもとに、英語学習が楽しく満足でき、そして、継続できる仕組みの理解に向けた実証的研究を行う。そのために、本研究では、日本人大学生から質問紙を用いて量的データを収集・分析して解釈する。
⑨ 10:00~10:25	林 千代(国立音楽大学) 岩本 典子(東洋大学) 大畑 甲太(フェリス学院大学)	Japanese college students' beliefs and motivation for learning English: A mixed methods study	Among various types of individual variables that learners bring to language classrooms, beliefs and motivation about language learning are highly influential variables in their behaviors and performances. The current study reports a mixed methods study which investigated EFL learners' beliefs and motivation for learning English with 1,057 students from five universities in Tokyo. In the first phase of the study, students' beliefs and motivation were quantitatively investigated with two questionnaires (Horwitz, 1988; Hiromori, 2006). The statistical analyses of these questionnaires showed that the desire to communicate in English were significantly related to autonomous types of motivation for learning English (e.g., intrinsic motivation). Furthermore, the results revealed some unique differences in the participants' motivation and beliefs due to their university majors (music, commerce, science & engineering, English, and physical education). In the second phase of the study, follow-up interviews were conducted with some students from three universities (majors: music, science & engineering, and English) to gain deeper perspectives. The results of the interviews revealed that while these students shared similar and common beliefs about learning English (e.g. value for communication skills in English), each of them demonstrated different perspectives and reasons for learning English. This presentation will discuss these findings, including limitations, future directions of the research, and pedagogical implications for language classrooms.
⑩ 10:30~10:55	三ツ木 真実(小樽商科大学)	英語学習における動機変容プロセスと変容をもたらす要因 -PAC分析とTEAによる質的調査-	本研究の目的は、大学生英語学習者の英語学習経験の語りを通じて、英語学習の動機づけにおけるダイナミックな変容プロセスと変容をもたらした要因を捉えることである。この研究では、インタビューを中心としたデータの収集と分析を行った。動機変容の過程で調査協力者にどのような経験があったかを具体的に捉えるために、個人別態度構造分析(PAC分析)(内藤, 2002)を実施した。その結果を踏まえて協力者へのインタビューを行い、線径路・等至性アプローチ(TEA)(安田・サトウ, 2017)による分析を行った。分析の結果、英語学習環境及び生活環境の中に存在する様々な社会的要因が学習者の動機の向上や減退に影響を与え、さらにはロールモデルとの出会いや他者との比較等の具体的な出来事によって協力者に新たな信念や価値観が生じ、それらが学習動機に変容をもたらしていたことが明らかとなった。
⑪ 11:00~11:25	古賀 功(龍谷大学) 今野 勝幸(龍谷大学)	Exploring antecedent factors of WTC in classrooms	The recent focus on English education in Japan is placed on communication skills that are required both intrinsically and extrinsically to interact with non-English and English speakers inside and outside of classrooms. As MacIntyre (2007) indicates, willingness to communicate (WTC) is a useful indicator to demonstrate to what extent learners have immediate volition to initiate communication in English. Many previous studies have targeted trait-like WTC to account for general communication behaviors in L2, but researchers' interest has been shifted to more situation-specific WTC. This research deals with both types of WTC with special attention to WTC in class, which helps to understand learners' inclination to use English. A total of 296 university students majoring in engineering and informatics participated in this study. A questionnaire was administered to measure the two types of WTC, intrinsic and extrinsic motivational subtypes, L2 selves, and classroom environment factors. The results of regression analyses revealed that trait-like WTC was partly predicted by WTC in class, suggesting the necessity of stimulating WTC in class. Furthermore, WTC in class was explained by various motivational factors. Unexpectedly and interestingly enough, of all, external regulation and even amotivation appeared to be significant predictors. This result implies that teachers should consider multiple approaches to successfully enhance their learners' intention to interact with their peers in class. Besides intrinsic reasons, learners sometimes need external reasons to accomplish their communicative goals in classroom contexts.
⑫ 11:30~11:55			

8月18日(日) 第7室(総合教育棟304) 【テスト・評価】

時間帯	発表者	発表タイトル	発表要旨
⑧ 9:30~9:55	金子 淳(山形大学 地域教育文化学部) 山口 常夫(東北文科大学) 小林 英治(山形県立谷地高等学校)	中学校・高等学校教員のパフォーマンステストに関する意識についての定性調査 - 計量テキスト分析 (テキストマイニング) の観点から -	パフォーマンステストへの取り組みが盛んになってきている。しかし、それに対する、現場の教員の意識はあまり省みられてこなかった。この点を探索するため、やまがた教育振興財団の研究助成を受け、山形県教育委員会・市町村教育委員会と連携し、県内すべての公立中学校・高等学校教員を対象とした意識調査を実施した。定性調査・質的研究の要素を持つため、自由記述とした。前処理の後、KH Coderを用い、テキストマイニングを行った。共起ネットワーク図、対応分析図等から分析・考察した。その結果、現場の教員は、時間や人員の確保、準備や練習、観点や評価など、パフォーマンステストの実施・運用面に、課題や問題を抱えていることがわかった。また、中学校教員は抽象的かつ共通した回答傾向、高等学校教員は個別でばらけた回答傾向が見られた。これらを踏まえた上で、パフォーマンステストを実施していくように、対応策を検討した。
⑨ 10:00~10:25	菊原 健吾(信州大学大学院生)大内 瑠寧(信州大学大学院生)伊東 哲(東京学芸大学大学院生)黒柳 美結(信州大学大学院生)青山拓実(信州大学)酒井英樹(信州大学)	論証によるアプローチに基づいたライティング・パフォーマンス評価方法の妥当性検証	本研究では、信州大学の文部科学省委託事業「中学校・高等学校における英語教育の抜本的改善のための指導方法等に関する実証研究」において開発した、ライティング評価方法の妥当性を検討する。CEFR-J(投野, 2013)におけるA1.2、A2.1、B1.1のCAN-DOディスクリプタを参照し、3つのタスクを作成した。各タスクへの回答を課題達成及び使用言語の観点から評価し、学習者のレベル(A1.1~B1.2)を判定した。主にKoch & Chapelle(2018)の論証によるアプローチの枠組みをもとに、5つの推論(得点化、一般化、説明、外挿、決定)について検討した。各推論における裏づけを示すために、中学3年生のデータを対象にして、含意尺度(Hatch & Lazaraton, 1991)の分析、ラッシュ分析、GTECの結果やCAN-DOリストの自己評価との相関分析を行った。
⑩ 10:30~10:55	三上 綾介(名古屋大学)	Investigating measurement accuracy for measures of lexical richness: Comparison of subjective and objective methodologies	This study investigated the linguistic measurement accuracy of a 1000-point free-moving slider developed by Saito, Trofimovich, and Isaacs (2017), who had 10 expert native judges, using a slider, subjectively assess 11 linguistic qualities in speech samples elicited from 40 French speakers of English that were published in Isaacs and Trofimovich (2012), using the domains of phonology, lexis, grammar, and discourse. In addition, they obtained 19 objectively coded linguistic scores associated with the four linguistic domains, also from the precursor study. Finally, the researchers calculated the correlation coefficients between the 11 subjective measures (on a 1000-point scale) and 19 objective measures (coded measures from Isaacs & Trofimovich, 2012) to validate the subjective measurement methodology. The results showed moderate to high correlation coefficients among the 11 subjective and 18 objective measures. However, it remains unclear whether the raters made fine distinctions on the order of 1 point out of the score of 1000. The current study revisited the accuracy of the subjective measures in this methodology, specifically targeting lexical richness. Four expert judges subjectively assessed the lexical richness of speech samples obtained from 45 Japanese learners of English. In addition, type and token frequencies were coded to obtain objective measuring scores. Spearman's rank correlation analysis elicited significant and high correlation coefficients, with rho values of -.82 of type frequency ($p < .001$) and -.76 of token frequency ($p < .001$). Further discussion is given on the basis of the results.
⑪ 11:00~11:25	斉田 智里(横浜国立大学)	パフォーマンス評価における多値型採点の有効性の検討 - 「書くことの調査」及び「話すことの調査」を例に -	パフォーマンス評価では、正答・誤答の2値より、部分点や観点別段階評定の多値による採点が多く行われる。平成31年度全国学力・学習状況調査の英語でも、「話すこと」「書くこと」及び技能統合型の調査項目に、正答、準正答、誤答の多値型採点が適用された。多値型採点は、手間はかかるがよりきめ細かく学習状況进行评估することが可能になるという利点がある。一方で、多値型採点が評価の目的に照らして有効に機能しているかという検証は必要である。本研究は、全国学力調査と同様の方法で採点された、国立教育政策研究所実施の「書くことの調査」(H22)及び「話すことの調査」(H17)の実データをもとに、正答、準正答、誤答の多値型採点の有効性の検討を行った。段階反応モデルを適用してカテゴリ確率曲線を検討したところ、「話すことの調査」及び「書くことの調査」の多値型採点項目の約7割で、部分点が有効に機能していないことが示唆された。
⑫ 11:30~11:55	久保田 恵佑(福島県立新地高等学校)	A performance-data driven approachを用いた採点基準の一般化可能性 - 技能統合型ライティングタスクの場合 -	大学入試改革に伴い、技能統合型タスクが定期テストなどの教育現場にも広まっていくことが期待されている。しかし、民間試験の採点基準は学習者の熟達度や各教育現場の評価目的に合わず、その評価の妥当性を損なう可能性がある。学習者の熟達度や評価目的に応じた採点基準検討のためには、学習者のパフォーマンスを用いて採点基準を作成する方法(a performance-data driven approach)が効果的だと考えられる。しかし、その一般化可能性については議論が分かれており、技能統合型ライティングタスクにおいても研究の蓄積が求められている。そこで本研究は、EBB methodを採用し、技能統合型ライティングタスク向けに作成されたEBB尺度の一般化可能性を多相ラッシュ分析から検証した。検証の結果、EBB尺度のテスト間での一般化は困難であることが示され、EBB尺度の応用可能性について示唆が得られた。

8月18日(日) 第8室(総合教育棟309)【教材・カリキュラム】

時間帯	発表者	発表タイトル	発表要旨
⑧ 9:30~9:55	山崎 真紀(熊本県立高森高等学校)	高校の英語の授業へのauthentic materialsの導入に関する報告	高校の英語の授業にauthentic materialsを取り入れることは、高校生にネイティブスピーカーが日常的に使っている英語に触れさせ、外国の文化に触れさせる機会になる。このような取り組みは異文化理解を掲げている学習指導要領の外国語の目標に合致するものでもある。今回、高校生の学習レベルに合わせてauthentic materialsを選び、教科書の学習内容と関連付けてauthentic materialsを継続的に授業に導入し、オリジナルが持つ英語の響きの美しさや内容の深さに触れさせ、英語の世界の豊かさを知るきっかけを提供した。その結果、ネイティブスピーカーが実際に使っている英語を理解できたという実感と自信を高校生に持たせることができた。本発表では、authentic materialsを導入した授業の数例を選び、authentic materialsの導入の効果について報告を行う。
⑨ 10:00~10:25	山本 享史(天理大学)	英語教育における異校種間連携を求めてー学習到達目標のもつ可能性ー	近年、英語教育における異校種間の「接続」や「連携」の重要性は広く共通のものになっているように思われる。本発表では、現在ほとんどの学校で設定されている英語教育における学習到達目標が、連携推進の可能性を持つものであることを示唆する調査結果について報告を行う。発表者が行ったのは、ある私立学校法人に所属する小学校、中学校、高校の一貫した英語教育学習到達目標作成のプロジェクトに中心的に関わった教員への面接調査、及び当該学校法人所属の英語科教員への質問紙調査である。調査結果が示していたことは、学習到達目標に関わる活動は教員に俯瞰的な視座の獲得、授業形態や評価方法の変化等をもたらすだけでなく、異校種の英語教育への理解を深めるということである。さらに、「連携推進のために交流を増やす」という図式から離れ、到達目標を軸に、お互いに「無駄のない」繋がりを求めることが、学校現場の実情に即しているように思われた。
⑩ 10:30~10:55	東野 裕子(日本体育大学)	「主体的・対話的で深い学び」を育む英語絵本活用基準表の提案	公立小学校では2020年4月より第3・4学年で「外国語活動」、第5・6学年では「外国語科」として4技能5領域を扱う。次期小学校学習指導要領は、絵本を「主体的に聞かせる」活動や高学年の「読むこと」において、絵本の活用を謳っている。しかし、そこには活用すべき英語絵本の選択基準、また、絵本選択後の活用法や授業展開例は提示されていない。本発表では、できる限り多くの英語絵本を収集し、①テーマ、主な文法構造、語彙数(見出し語)、1ページの文の数、ページ数(場面数)などで分析し、②①を基準とした発達段階に応じた英語絵本「基準表」を作成する。この基準表により、③英語絵本を活用した単元の開発を行い、④当該単元を実施することで「主体的・対話的で深い学び」が可能となることを検証する。検証にあたって、授業の際の児童の意識や意欲のアンケート調査や振り返りによる質的資料を採用する。
⑪ 11:00~11:25	中村 洋(ニセコ町立ニセコ中学校)	新学習指導要領への移行期における小学校の授業の成果と課題ーWe Can!を使用した教員と生徒を対象にしたアンケートを基にー	新学習指導要領への移行措置及び先行実施期間である2018年度から2019年度までの2年間に、小学校では新たに、「読む」「書く」を含めた4技能の指導も行うために編集された新しい小学校外国語活動教材であるWe Can!を、Hi, friends!と併用して授業を行っている。本研究では、We Can!で扱われる活動の分量や難易度について学校現場ではどのように評価されているかを考察するため、1年間にわたり実際にWe Can!を活用した授業を行った小学校教員、及びWe Can!で学習して中学校に入学した中学校1年生を対象に質問紙による調査を行った。また、教員を対象にした、授業時数の増加や新たに始まる評価に関しても調査を行い、移行期間1年目の成果と課題について考察していく。
⑫ 11:30~11:55	高島 英幸(東京外国語大学)村上 美保子(茨城キリスト教大学)今井 典子(高知大学)杉浦 理恵(東海大学)桐生 直幸(鎌倉女子大学短期大学部)東野 裕子(日本体育大学)	「フォーカス・オン・フォーム指導」による英語の後置修飾の習得ー小・中学生の縦断的調査研究ー	本研究は、外国語の指導法であるPPP型指導(教師が目標言語材料を提示し、練習・活動させる指導)と「フォーカス・オン・フォーム指導」(Task-based Language Teaching (TBLT)を理論的な基盤とし、課題解決型の言語活動を授業に導入する指導)の効果と比較したものである。2つの市の小・中学校で異なる指導法で授業を行い、小学校6学年から中学校2年生までの3年間、同一の児童・生徒について、学習動機の変化や言語能力の発達を質的・量的に追跡調査した。小・中学校における英語授業内容の基盤を課題解決型の言語活動に置くことが、(1)児童・生徒の英語に対する学習動機の向上・持続に繋がり、(2)小中連携による英語のコミュニケーション能力の伸張、英語学習の効率性・効果に資することを縦断的に検証した。本発表では、学習者個々のデータを分析し、英語の後置修飾の学習過程を明らかにする。

8月18日(日) 第9室(総合教育棟310) 【ICT・CALL/教材・カリキュラム】

時間帯	発表者	発表タイトル	発表要旨
⑧ 9:30~9:55	永所 秀崇(大阪教育大学院生) 松原 万里子(大阪教育大学大学院) 吉田 晴世(大阪教育大学大学院)	「ICTを組み込んだ教員養成課程学生のためのアクティブ・ラーニングの実践」	アクティブ・ラーニングやICTを活用した授業が注目されており、両者を組み込んだシラバスをもとに、2018年4月から7月、10月から1月の期間、教員養成過程の学部1年生60名を対象に、無料アプリケーションKahoot!を用いた教材作成と発表実践を行った。Kahoot!は、ゲーム型学習応答システムであり、教員にとっても、難しいPCスキルは必要なく、自由に問題を作成したり、結果をダウンロードすることで、各学生の進捗状況を把握することが可能である。ICTについての関心度、アクティブ・ラーニングへの学習意欲の変化を測定するため、事前・事後アンケートの結果を分析し、さらに、各後期試験での語彙力と読解力の測定分析をおこなった。その結果、学習意欲については、事前と事後との間に、外発的・内発的動機付けとともに、正の相関が認められ、語彙力と読解力の測定分析においては、語彙力が有意に伸びた。
⑨ 10:00~10:25	武田 淳(国立仙台高等専門学校) 亀山 太一(国立岐阜工業高等専門学校) 青山 晶子(国立富山高等専門学校)	理工系学生に特化した教材作成と授業支援データベースの構築	全国に57校61キャンパス存在する高等専門学校(高専)は、戦後の復興期に優れたエンジニアを一日も早く社会に送り出すことを目的として創設された5年一貫教育を標榜する理工系高等教育機関である。3年前のカリキュラム改編に伴い、英語を始めとする一般教科は実質的な授業時間削減を強いられしたが、一方、卒業時に期待される学力の水準はむしろ上がってきており、授業担当者は他の教育機関にはない対応を迫られている。対応策として筆者らは、理工系学生に特化した教材の作成に取り組み、これまでに必修用語集や読解用教科書など、複数の教材を発表してきた。2017年度からはこれを更に発展させ、複数の英語教員がそれぞれ独自に作成した授業用資料を取りまとめ、高専共通のネットワーク上にデータベースを構築し、互いに提供しあう相互支援体制を確立しつつある。複数の教員による教材作成や資料提供のメリット等について発表する。
⑩ 10:30~10:55	青木 信之(広島市立大学) 渡辺 智恵(広島市立大学) 池上 真人(松山大学)	大学共通教育期間を通したe-ラーニングの効果 - TOEICと学習履歴から -	発表者らはこれまで大学生を対象として、e-ラーニングを活用した英語力向上について様々な観点から研究してきた。学習前後に受けるTOEICで大きな効果を見せるのは、どのような学習をしている者か、また教師側、システム側でどういった支援が必要かなど、マネジメントの点からもみてきた。しかしながら、様々な要素が関わることもあり、1、2年次生対象の共通教育期間全体として英語力がどのように変化していくのかということについては、これまでほとんどみてきていない。1年前期の受講で向上した英語力も、夏休み後にはかなり低下していることなど、すでに把握している事実もあるが、本研究では1年次4月に受けるTOEICから2年次12月のそれまで、英語力がどのように変化していくのか、またe-ラーニング学習とどのように関係しているのかなど、e-ラーニングのLMSに残った履歴という点からみていきたい。
⑪ 11:00~11:25	竹野 純一郎(中国学園大学国際教養学部)大橋 典晶(中国学園大学国際教養学部)松浦 加寿子(中国学園大学国際教養学部)	5W1Hの位置に着目したAI翻訳の可能性	AI翻訳の進化は目覚ましい。「グーグル翻訳」は、人間の脳神経の仕組みに着想を得たニューラルネットワークを機械翻訳に導入した。自ら学習を行うグーグルの機械翻訳は、文章の翻訳の際に、文ごとに訳すのではなく、文脈に基づいた訳語を選択し、ことばの並びを変えて調整しそれぞれの文を訳すことで、より人間に近い翻訳を可能にした。さらに、「グーグル翻訳」では機械が自ら学習するよう構築されているので、ユーザーの利用によってより自然な翻訳が可能になるようだ。筆者らは、「グーグル翻訳」を用いて一定量のデータ収集を行い、英日・日英翻訳の5W1Hの位置に着目してAI翻訳の特徴や傾向の調査を行う。その際に、主語が示されていない日本語の英訳について、AI翻訳は文脈から正しい主語の選択ができるのかなどについても分析をしたい。産出データの分析結果から、英語力を高めるためのAI翻訳の教育的な活用方法を提案したいと考える。
⑫ 11:30~11:55	中西 のりこ(神戸学院大学)	「音素カウンター」音声認識入力機能を用いた英語発音の効果	2016年冬から無料で一般公開している「音素カウンター」は、入力された任意の英文を発音記号に変換し、文中に含まれる各音素数を出力するwebシステムである。これまでに何度かのバージョンアップを経て、2019年春からはGoogle Chromeブラウザ上で音声認識による英文入力が可能となった。本発表では、関西の大学1年生(n=126)を対象とした「英語会話」の授業実践の効果について検証する。この授業では「音素カウンター」2画面のうちの片方はキーボード、他方は音声認識で同じ発表原稿を入力し、それぞれの出力結果に含まれる音素数を比べることで学生が自分の苦手とする発音を見つけ、システムに搭載されている動画を見て練習をするという課題を課した。授業ごとに学生が提出するコメントを分析した結果、前年度と同じ科目を履修した学生よりも、自分自身の英語発音についてより具体的に的確な記述が多く見られた。

8月18日(日) 第10室(総合教育棟404)【SLA・言語習得】

時間帯	発表者	発表タイトル	発表要旨
⑧ 9:30~9:55	片山 圭巳(熊本大学)	Effects of POV and Amplitude on Vowel Perception in L2 Phonotactic Contexts	It has been reported that native Japanese speakers perceive an illusory epenthetic vowel between consonants in illegal phonotactic contexts in their first language, while it has also been reported that subsegmental acoustic information of an L2 syllable affects perception of a vowel. Thus, in this study, the effects of pre-obstruent voicing (POV) and amplitude on perception of a vowel both in legal (V1C1UC2V2 such as ebuzo) and illegal (V1C1C2V2 such as ebzo) phonotactic contexts by native Japanese speakers with different levels of English proficiency were examined. A forced-choice task was performed by a group of native Japanese speakers with a high level of English proficiency (JH), a group with a low level of English proficiency (JL) and a group of native English speakers (ES) using non-words that were manipulated with POV by eliminating it in steps (25%, 50%, 75% and 100%) and with amplitude by increasing it (+3 dB and +6 dB) and decreasing it (-3 dB and -6 dB) under both the conditions of legal and illegal phonotactic contexts in Japanese. The results showed that ES were the most accurate among the groups and JH were more accurate than JL and that the native Japanese speakers tended not to perceive the vowel even in legal phonotactic contexts, while native English speakers identified it. Furthermore, both amplitude and POV affected the perception of the Japanese groups and the effect of POV was stronger. Thus, perception of a vowel by native Japanese speakers is likely to be affected more by low-level acoustic information than by phonotactic constraints in L1.
⑨ 10:00~10:25	山本 昭夫(学習院高等科)	Repetition in EFL - An ecological approach to EFL	Everyone agrees that repetition is important for learning in general and this is especially true for learning languages. There have been numerous ways to learn English by repetition in the context of EFL. The purpose of this presentation is to introduce an ecological approach to repetition in EFL in order to know more about the reasons some ways are more effective and others are not. The environment or circumstances where we are located changes every second. We are just one of the agents of action in the circumstances and each action is affected by the changes of the circumstances. We cannot create the same environment or circumstances where we learn to use English even if we try to. However, EFL learners tend to think it is the same act in a fixed situation when they practice a certain target expression. If the learners focus on some differences in the circumstances where they are located when they use English as the target language, we may be able to adjust ourselves to different circumstances. Then it will be possible for us to develop abilities of adjusting ourselves to microslips that will happen in those changing circumstances. The Plus-one Dialogue created by ITO Yuji and pair-work with partner-change like a folk dance are leading examples of microslip-conscious activity. What is repetition in extensive reading will also be discussed.
⑩ 10:30~10:55	石崎 貴士(山形大学) 吳 如恵(銘傳大学)	母語と第二言語で生じるストループ効果—台湾での実験結果を加えての検証—	第二言語学習者における母語と第二言語の処理については、その関係性をめぐって未だ議論の対象となっている。これまでにその解明を試みたアプローチの一つに、ストループテストを活用した一連の研究がある。しかし、先行研究によって実験の結果と主張の根拠としているモデルとの間に一貫しない部分もあり、理論的・方法的な課題を指摘することができる。そこで本研究では、より包括的な言語情報処理モデルの構築を目指し、新たに開発した音声反応形式のストループテストを用いて、これまで英語を第二言語として学んでいる日本語母語話者の大学生を対象に実験・検証を行ってきたが(石崎2018, Ishizaki 2019)、今回は実験の対象を台湾で第二言語として日本語を学習している大学生(中国語母語話者)にまで広げ、さらなる検証を行った。
⑪ 11:00~11:25	石川 正子(城西大学) 鈴木 渉(宮城教育大学)	筆記ランゲージングは言語適性を補うか?	「筆記ランゲージング(written languaging)」とは、学習者が自身の考えを書き表す行為で、第二言語学習を促進する活動であると報告されてきた。しかし、詳細なメカニズムやその効果に影響を及ぼす要因(習熟度、言語適性など)の解明にはまだ至っていない。そこで、本研究では、筆記ランゲージングと学習者の言語適性の関係解明を試みた。35名の大学1年生に冠詞を目標項目とする作文をさせた後、モデル作文を提示した。18名には冠詞の使い方について自分自身の言葉で書いて説明(筆記ランゲージング群)、17名にはモデル作文を筆写(筆写群)するように求めた。3種類の言語適性テストと事前・事後テスト(認識型、産出型)結果の相関を分析した結果、筆者群には相関関係が多く見られたが、ランゲージング群にはほとんど見られなかった。これらの結果は、筆記ランゲージングが学習者の言語適性を補うことを示唆するものである。
⑫ 11:30~11:55	鈴木 渉(宮城教育大学) 佐久間 康之(福島大学) 西山 めぐみ(人間環境大学) 上田紋佳(岡山大学) 寺澤孝文(岡山大学大学院)	短時間学習における英語力の発達	これまで、学習による英語力の長期間にわたる積み重なりについて検討した研究・実践はほとんど見当たらない。発表者らは、その積み重なりについて、マイクロステップ法に基づく短時間英単語学習(約5分から15分程度)のためのオンラインシステムを用いて実践してきた。このシステムでは、英単語(難易度ごと11のレベルに分けられた1,152個)が、2種類のサイクル(2日おき・4日おき)で出現し、学習者はそこで出現した英単語の意味を4段階(「よい」「もう少し」「だめ」「全くだめ」)で自己評価する。三年間(2015年度、2016年度、2017年度)にわたり、様々な英語習熟度が想定される大学に通う学生(延べ1,500名程度)を対象として、実践を行ってきた。その結果、(1)自己評価の微視的な上昇と(2)自己評価と客観テストの間に正の相関が確認された。これらの成果に基づき、今後の研究・実践の展望について議論する。

8月18日(日) 第11室(総合教育棟405)【SLA・言語習得】

時間帯	発表者	発表タイトル	発表要旨
⑧ 9:30~9:55	近藤 隆子(静岡県立大学)白畑 知彦(静岡大学)須田 孝司(静岡県立大学)小川睦美(日本大学)横田秀樹(静岡文化芸術大学)	Effects of explicit instruction on intransitive and transitive verbs in L2 English	The present study examines whether adult Japanese learners of English (JLEs) are able to use intransitive and transitive verbs in their correct structures after a series of instructional sessions, and whether the effect of instruction can be observed with verbs which are not part of instruction. L2 learners have been reported to make errors concerning the structure of verbs. For instance, they tend to overpassivize intransitive verbs (Zobl 1989, Hirakawa 1995) or use transitive verbs in the intransitive structure (Kondo 2014). In this study, we shed light on whether explicit instruction can be effective for JLEs to avoid the errors aforementioned, not only with verbs which are explained in instruction but also with those which are not. The participants were 33 university students, 15 as an experimental group and 18 as a control group. The experimental group was given a pre-test, three explicit instructional sessions, an immediate post-test and delayed post-test whereas the control group was given only the pre-test and the delayed post-test. We tested 10 intransitive verbs (appear, happen, rise, exist, remain, fall, depart, disappear, die, belong) and 10 transitive verbs (hire, accept, invite, damage, destroy, publish, reject, build, promote, read), half of which were not explained in instruction. The results show that the experimental group improved on their accuracy of intransitive and transitive verb usages in the post-tests, and interestingly the improvement was observed with both instructed and non-instructed verbs. By contrast, the control group did not show such an improvement in the post-test. We will discuss the implications of these findings for English education.
⑨ 10:00~10:25	田中 順子(神戸大学大学院)	英語冠詞選択時のプロセスについて	本研究では、英語が第二言語(L2)である日本人大学生(N=10)が、視線追尾をされつつパソコン上で英語冠詞選択課題を行い、その直後に自分の視線の動きが記録された動画を見ながら、回答時のプロセスを内省して発話した。その音声データを、主として冠詞選択課題の問題特性と発話内容との関係性の観点から分析した。また、回答時の視線の動きや回答の正確さも加味して検討した。比較群として英語が母語(L1)の者(N=4)が、日本人大学生の場合と同様に、視線追尾をされつつ英語冠詞選択問題を解き、自身の視線の動きを記録した動画を見ながら内省して発話した。分析結果から、困難であることが予測された意味カテゴリーを含む冠詞選択課題については、参加者が回答時に困難さを覚えていたことが、正答率からだけではなく内省の内容からも確認された。
⑩ 10:30~10:55	浦野 研(Hokkai-Gakuen University)	Japanese learners' reliance on specificity when using the English articles: A forced-choice gap-filling study	Mastering the article system in a second language is challenging, especially when the learner's first language does not have articles. Previous studies (e.g., Ionin, Ko, & Wexler, 2004) have demonstrated that speakers of article-less languages often fail to use the English articles correctly because they wrongly rely on specificity, rather than definiteness. The present study has attempted to examine (a) whether or not Japanese learners of English can use definiteness when choosing the English article, and (b) to what extent they are influenced by specificity. Fourteen adult Japanese learners of English were recruited to perform a forced-choice gap-filling task, in which they were asked to read dialogs in English and choose either the indefinite or definite article for target noun phrases. Four conditions were created, namely, DS [+definite, +specific], DN [+definite, -specific], IS [-definite, +specific], and IN [-definite, -specific], and eight dialogs were presented for each condition (taken from Ionin, Ko, & Wexler, 2004). Mean choices and standard deviations of the indefinite article were 2.00 (2.22), 3.14 (2.38), 4.43 (2.44), and 6.14 (1.61), respectively. The overall results indicate that the Japanese learners of English can use definiteness when choosing the English article, though not perfectly. At the same time, they are slightly influenced by specificity, even though it is not encoded in the English article system. A closer look at the individual data has revealed that eight of the 14 participants were influenced by specificity at least to some extent. These results will be discussed in comparison with relevant previous studies.
⑪ 11:00~11:25	高橋 俊章(山口大学)	具象名詞における冠詞選択基準の習得順序と教育への応用	具象名詞の場合における冠詞の選択基準についてL1・L2やESLの先行研究に基づいてレビューを行った。Warden (1976) では L1 児童の冠詞習得について調査をしており、定冠詞を適切に使用するために、話し手と聞き手にとって指示対象物が唯一であるか (Hawkins, 1991) を考えられる習得段階に至っていることが必要と考えられる。一方、不定の判断については「一般的・特定の」の基準 (Master, 1990) や「唯一性」の基準に基づいて選択されると考えられる。本研究では、これらの基準がどのように習得されて行くと考えられるかについて Trenkic, et al. (2014) の考え方を参照して考察した。
⑫ 11:30~11:55	武藤 美和(福島大学)	ライティング課題におけるメタ言語情報を伴う間接的フィードバックの効果	ライティングにおける間接訂正は、学習者のエラーに対する気づきと理解を促すが、言語知識が乏しい学習者はエラーに注意を向けにくい傾向がある。エラーの修正率が低い傾向にある。Bitchener (2018) によると、間接訂正に加えてメタ言語情報を与えることによって、学習者の言語形式への注意が高まる可能性がある。そこで、本研究では間接訂正とメタ言語情報によるフィードバックの有効性を検証した。その際、メタ言語情報は学習者自身のエラーに関連づけて処理される必要があることから、メタ言語情報にエラーコードを付加したフィードバックも併せて検証を行った。実験では、日本人大学生を間接訂正群、間接訂正+メタ言語情報群、そして間接訂正+メタ言語情報+コード群の3群に分け、ライティング課題に取り組みさせた。1週間後、群ごとのフィードバックを与えて修正を促し、その前後のエラーの割合を比較した。

8月18日(日) 第12室(総合教育棟406)【リーディング】

時間帯	発表者	発表タイトル	発表要旨
⑧ 9:30~9:55	卯城 祐司(筑波大学)小木曾 智子(筑波大学大学院)神村 幸蔵(筑波大学大学院/日本学術振興会)佐々木 大和(筑波大学大学院)名畑目 真吾(筑波大学)細田 雅也(東京都市大学)青木 重憲(筑波大学大学院)岡田 龍平(筑波大学大学院)小室 竜也(筑波大学大学院)Voslar Mat(筑波大学大学院)	物語文における時間・空間・登場人物に関するつながりの理解—視線計測データの分析から—	物語文の読解において、読み手は出来事や登場人物の行動などの複数の情報(次元)からつながりを理解する必要がある。本研究では、時間(時系列や順番)、空間(位置関係)、登場人物(特徴と行動)に焦点を当て、英語学習者の読解における情報のつながりの理解を視線計測により検証した。実験では、大学生がPC上で英文を読解し、読解中の視線が測定された。協力者は、各次元に関して後半(When John got off the train, Amy was already waiting.)と前半が一致/不一致([John's/Amy's] train arrived 20 minutes earlier than [Amy's/John's] train.)となる英文を読んだ。一致/不一致情報の注視時間や読み戻りなどを分析した結果、英文読解中の学習者の認知処理や読解指導についての示唆が得られた。
⑨ 10:00~10:25	畑江 美佳(鳴門教育大学)門田 修平(関西学院大学)	音声・位置関係・学年が視覚提示英単語の処理に与える影響—小学児童の眼球運動分析—	中学以降のリーディング力向上のために、小学校で始まるリーディング学習初期から、段階的・系統的な指導が重要となる。本研究では、「正確で流ちょうな英語リーディングの基盤を育成する小学校での文字指導」をテーマに据え(科学研究費補助金 基盤研究(B) 課題番号18H00692)、研究1年目の2018年度に、日本人児童1~6年生267名を被験者とし、綴りを伴うピクチャーカードをモニターに映し、アイトラッカーによる個別の眼球運動測定調査を実施した。視覚提示英単語の処理を左右する要因の分析をした結果、「学年が上がるにつれ文字を見る回数が増える」「児童は絵でも綴りでも上にあるものを見る回数も時間も多い」「音声を伴わないピクチャーカードを見ている時のほうが、文字を見る回数も時間も多い」等が統計的に明らかになった。これらの結果を踏まえ、児童に文字を与える適期やリーディング力に繋がる有効な指導法を検討する。
⑩ 10:30~10:55	田中 菜採(山口県立大学)	時間制限のある英文提示は英語学習者の速読を促進するか	情報量の多い英文を効率的に読解するには、速読スキルが必要となる。例えばスキミングでは、大まかな概要を素早く把握する。ただし、英語母語話者は全体を均等に速く読んでいるのではなく、重要な情報に重点的に時間をかけるが(Raynerら, 2016)、日本人英語学習者はボトムアップ処理を重視する傾向にあり、時間制限のない読解で重要な情報に方略的に素早く注目することは難しい。一方で時間の限られたスキミングでは、文章の最初の段落やページに書かれている内容を他の部分よりも注目して読み、効率的に情報を得るというストラテジーが働くため、時間制限によって情報の取捨選択を促すことが期待できる。そこで本研究では日本人英語学習者を対象に、厳しい時間制限をつけて英文を提示し、通常読解と比較することで、時間制限が読解ストラテジーの変化に結びつき速読を促進するかを検証した。また、学習者の英文読解熟達度との関連も検討した。
⑪ 11:00~11:25	稲岡 類(筑波大学大学院)	グラフィックオーガナイザーを用いた読解活動—活用方法に焦点を当て—	英文読解では内容理解のためにテキスト情報を整理、統合する力が求められる。現在は読解指導に絵や図式でテキストの内容理解を促進・支援する活動(i.e., インフォメーション・トランスファー、グラフィックオーガナイザー)が取り入れられ、活用方法について様々な議論がされている。グラフィックオーガナイザーの例としてGrabe(2009)ではベン図やフローチャートなどを示している。先行研究(e.g., Suzuki, 2007)では図式の提示がテキスト情報の想起を助けるほか、概念関係を理解するのに役立つことが示されている。一方、石井(2006)では学習者に図式を提示する群と学習者が図式を完成させる群を比較した結果、読解成績の向上には繋がらなかった。本研究では読解中にグラフィックオーガナイザーを様々な形で活用し読解成績との関連性を調査し、英文読解に与える影響について示唆が得られた。
⑫ 11:30~11:55	森 好紳(白鷗大学)	グラフィックオーガナイザー作成タスクの評価の信頼性—読み手の概要理解を中心に—	読み手が文章の概要を理解するには、それぞれのテキスト情報とそれらの結びつきを理解する必要がある。このような英語学習者の概要理解を促す一方法として、文章の概要を図式化したグラフィックオーガナイザーを作成させるタスクがあげられる。しかし、学習者が作成したグラフィックオーガナイザーを評価する際の信頼性については十分に検証されておらず、本研究ではこの点を検証した。実験は日本人大学生を対象として実施され、材料として文章全体を要約した文、各パラグラフを要約した文、詳細情報から構成される説明文が用意された。協力者は説明文を読解し、テキスト情報間の結びつきを図式化した。そして、協力者が作成したグラフィックオーガナイザーは複数名で評価され、事前に作成されたグラフィックオーガナイザーのモデルとの比較を通して採点された。採点の信頼性を分析した結果、信頼性に影響を与え得る採点の要素に関して示唆が得られた。

8月18日(日) 第13室(総合教育棟409)【教員養成・教師教育】

時間帯	発表者	発表タイトル	発表要旨
⑧ 9:30~9:55	竹田 里香(姫路獨協大学(非常勤)) 安達 理恵(愛知大学)	教員の感性を豊かにし授業が変わるドラマ体験の質的研究	「学び方」改革の中、柳瀬は人間の認識を感性・知性・理性と大別した場合、日本の英語教育は数値目標などに価値を置く知性中心で、感性を意識した教育も視野に入れるべきと主張している(柳瀬、2014、2016)。また、渡部は知識注入型の授業から獲得型授業へと変換するためにも教員が、感性を高める一つの方法であるドラマを体験してみることの重要性を主張している(渡部、2014)。そこで、指導者向けドラマワークショップに数回参加している2人の中高教員に、体験を通しての気づきや自身の変化、教員がドラマ体験をすることの教育的波及効果についてインタビューをし、質的分析の一手法であるSCAT分析(大谷、2011)を行った。結果、本物(教材)の持つ力・自己解放・無意識下の普段の授業姿勢の発見・学習者感覚・教師と生徒との人間関係の重要性などの概念が得られ、教員が感性を磨くことで教育の質的転換が起こり得ると考えられた。
⑨ 10:00~10:25	岡崎 浩幸(富山大学)	高校英語教師の授業力量形成につながる授業研究における省察に関する研究	日本の授業研究は教師の成長につながる営みとして世界の教育界から注目を集めている。その成果は、教師の授業の力量向上や、教師の生徒の学習を捉える力の向上であると考えられている(小柳他、2017)。一方、日本の高校では授業研究を行う頻度も少なく、協議会の方法も確立されていない現状がある(千ヶ布、2014)。本研究の目的は、高校英語教師が2回の授業研究を経て、協議会における省察にどの程度授業力量の向上につながる要素が含まれるのかを検証することである。研究協力者は、授業研究(授業観察とその後の協議会)を2回体験した12名(高校4名)の英語教員である。結果として、一部観察した事実に基づかない代案の提示など散見されるものの、どの教師の発言にも(1)生徒の学びの事実に基づいた発言、(2)生徒の学びの事実に基づいた指摘や代案の提示、(3)自分の授業への活用意識、の要素が含まれていることが明らかとなった。
⑩ 10:30~10:55	森岡 将太(広島大学教育学研究科)	Exploratory Practice(探究的実践)の概念からとらえる若手助言者の成長 - 助言者の自己内省がもたらす自身への深い理解 -	理解の深化に重点を置くことで教師の成長を促すExploratory Practice(探究的実践、EP)が注目されているが、教師と関わる助言者側の成長をEPの観点から分析する例は少ない。本研究では若手英語教師と関わる助言者(筆者)にどのような成長がみられるかをEPの概念を用いて明らかにすることを目的としている。助言者は若手教師との関わりの中で頼られたいという感情が肥大し戸惑う日々を送るが、自己内省を通じて戸惑いの原因が過去の経験を通して強められた承認欲求と結びついてということが明らかになる。そして助言者の自己理解の深まりによって戸惑いが軽減されたことで、EPが重視する理解の深化が助言者の成長にもつながるということを体感するに至る。
⑪ 11:00~11:25	片桐 一彦(専修大学)	コアカリ導入前の教職履修学生の学修発達状況	本研究の目的は、中学校・高校英語教員の養成における教員志望学習者の学修発達状況を、各学年の1年間の伸びを横断的にデータを収集して調べることである。省察するためのツールとして、「言語教師ポートフォリオ(J-POSTL)」(JACET教育問題研究会編2014)を使用した。参加者は開放制の教職課程(中学校・高校英語教員養成)を受講している私立大学文学部英語英米文学科2年生19名と3年生12名と4年生15名であり、学年始めと学年末にJ-POSTLの全96の自己評価記述文(SAD: Self-Assessment Descriptors)を使ってそれぞれ2回学修発達状況を5段階評価で自己評価・省察した。上述の96の自己評価記述文の構成枠組みごとに、また大学2年生、3年生、4年生別に分けて効果量(Cohen's d)を算出し分析をおこなった。
⑫ 11:30~11:55	阿部 雅也(新潟経営大学)	生徒・教師の英語学習に関するピループの比較研究	本研究の目的は、英語学習に関するピループが生徒・教師間または教師間でどのような違いがあるのかについて、第二言語習得理論における主要な4つのアプローチ、すなわち行動主義的、生得主義的、認知・発達論的、そして社会文化論的アプローチの各視点と関連させて調査し、比較分析を行うことである。研究に参加した531人の参加者(新潟県の高等学校に勤務する日本人教員35名とその生徒496名)の英語学習に対するピループを明らかにするための質問紙調査結果から、生徒・教師間では上記4つのうち特に行動主義と生得主義の視点で差異が認められ、生徒のピループは比較的行動主義に、教師は生得主義に傾いていることが明らかになった。また最も差異の大きかった「誤りの訂正」に関して教師間のピループを質的に比較分析すると、指導経験年数との関連性が示唆された。本研究結果を今後の教員研修プログラムにどのように活用していくべきか検討する。

8月18日(日) 第14室(総合教育棟410)【授業分析】

時間帯	発表者	発表タイトル	発表要旨
⑧ 9:30~9:55	渡辺 芳朗(愛知教育大学)	中学生の英語の躰きと英語技能の達成意識に関する検討	本研究の目的は、学習適性に注目した英語学習支援を実現するための第一段階として中学1年生の英語の躰きの原因と英語技能に対する中学生の達成意識を探ることである。2019年3月に中学1年生(N=1,503)を対象に、英語に対する苦手意識・躰きの時期と理由・英語科の目標に照らした英語技能に対する達成意識、について調査した。その結果、433人(28.8%)が英語を「とても苦手だ」「苦手だ」と答えた。また、396人(26.3%)の生徒が2学期の中頃から英語が難しくなったと答え、「英語の文法(697人46.4%)」「英語の文を書く(682人45.4%)」を主要原因に挙げた。達成意識に関する項目の平均点は「本文音読(3.99)」、「内容理解(3.71)」、「聞くこと(3.66)」が高く、「プレゼン(2.70)」、「やり取り(3.16)」が低かった。調査結果を示し、中学生の躰きの原因と学習支援のあり方について検討していきたい。
⑨ 10:00~10:25	藤居 真路(広島県立尾道商業高等学校)	EFLライティングにおけるルーブリック介入時の情意と学習態度	EFLライティングにおいて、ルーブリック評価は、学習者の英文を改善させるのに有用であり(Diab & Balaa, 2012)、また評価ツールとしてだけでなく教育ツールとしても有用であると指摘されている(Turgut & Kayaoglu, 2015)。実際、EFLライティングにおいて、例えば英語に特徴的な論理展開の基本を学習させることは重要であるが(大井, 2008)、その評価はパフォーマンスの熟達度を評価しているため、ルーブリック評価が適しており、教育的な効果を生むと考えられる(Wang, 2017)。しかし、こうした課題においてルーブリック評価を導入させて書き直させても、英文が改善しない場合がある。本研究では、EFLライティングの授業で、ルーブリック評価を導入させた場合、ルーブリックに対する理解や情意が、英文の改善とどのように関係しているのか探究した結果を報告する。
⑩ 10:30~10:55	鈴木 政浩(西武文理大学)	英語授業学の枠組にもとづく授業の効果—量的分析と質的分析の併用による学習者の授業に対する印象分析—	英語授業学とは授業の発展過程を枠組として提案し、その効果を検証する学問である。すでに確定した枠組から想定される授業の1つとして、学習スキルを配置したシラバスを提示し、簡易ポートフォリオとして活用する授業がある。本発表は学習者の自由記述とスケールによる回答を比較し、この授業に対する印象を分析することを目的とする。授業の課題はCNNを教材としたオーバーラッピングとフレーズサイトトランスレーションであった。半期最後の授業で、授業に対する印象について回答(スケールおよび自由記述)を求めた。スケールによる回答データを分析し、自由記述のデータと照合した。分析結果は、日本語のフレーズを英語に直すサイトトランスレーションが学力向上に影響している可能性を示唆した。また、学力が向上したのは、文レベルを意識していること、複数の技能や活動に並行して取り組んだためであると考えている傾向が認められた。
⑪ 11:00~11:25	清水 公男(文京学院大) 吉田 悠一(三重県松阪市立久保中学校)	OPPシートを活用した中学校英語のwriting学習に着目した授業研究—学習者が学び方を学ぶ学習を目指して	学びの本質は学習を通じて自身の学習プロセスを振り返り段階的に学習のきっかけをつかめるようになることである。これまでの英語の授業において、このような形式的学びの態度を育成するメタ認知的視点はさほど注目されてこなかった。本研究では、2018年に公立中学校2年生(約110名)を対象に実践した英語授業のwriting活動において用いたOPP(一枚ポートフォリオ)シートと、学習活動や課題ワークシートの内容に見られた学習者の躰き等を分析した結果、以下の4点が明らかになった。(1)何をどこまで学ばせるかという到達目標と学習(評価)活動の段階的構造化の必要性、(2)到達目標と学習(評価)活動との明確な連動化の重要性、(3)OPPシートを用いた、学習の習熟・進捗度に応じた学習活動の構造化の有効性、(4)学習者が学び方を学ぶ学習の育成の方向性。
⑫ 11:30~11:55	松井 かおり(朝日大学)	言語を創造する場としての協同的リフレクション—多文化・多言語活動における振り返り会の参加者の語りから—	本研究は、学習者が主体となった多文化・多言語活動の振り返り会の実践事例を通して、協同的リフレクションが、いかに学習者の感情的な経験を想起させ集団としての発達を促す場となり得るのかを考察する。通常、授業の振り返りは授業改善を目的とし、授業検討会のような公的な場において、あるいはジャーナルのような私的活動において授業者が主体となって行われている。また学習者の振り返りの場合、話し合いのほかりフレクションシートなども活用される。しかしその問題として、振り返り行為が問題解決という目的を前提としていることや言語化できない授業者・学習者の感性が捨象されてしまうことが指摘されている(佐伯 2018, 2019)。本研究では、特に外国語活動に伴う葛藤を含む参加者の感情が、他者との話し合いのなかでどのように表現され全体へ引き取られていくのかに注目して参加者の語りを分析し、協同的リフレクションの意義を述べる。

8月18日(日) 第15室(総合教育棟413)【ワークショップ】

時間帯	講師	テーマ	要旨
⑧ 9:30~9:55			
⑨ 10:00~10:25			
⑩ 10:30~10:55			
⑪ 11:00~11:25			
⑫ 11:30~11:55			

8月18日(日) 第16室(50周年記念会館1階第1会議室)【語彙】

時間帯	発表者	発表タイトル	発表要旨
⑧ 9:30~9:55	金澤 佑(Kwansei Gakuin University, School of International Studies)	Evaluating the Reliability of the English Formulaic Familiarity Database for Japanese EFL Learners	Although it has been known that frequency is one of the most important lexical/formulaic attributes in L2 processing and learning (Nation, 2016), it has also been proposed that there is a discrepancy between lexical/formulaic frequency and the actual degree of knowledgeability of the target item, especially for EFL learners (Jiang, 2018). Based on Amano & Kondo (1999)'s L1 study, Yokokawa (2006) introduced a theoretical L2 construct to applied linguistics in Japan: familiarity, which is a subjective version of frequency. Based on an extensive survey, Yokokawa (2009) produced the English Lexical Familiarity Database for Japanese EFL learners, which are available electronically. In view of the importance to go beyond isolated words to focus on multi-word sequences, or formulae (Siyanova-Chanturia & Pellicer-Sánchez, 2019), Isobe et al. (2016) produced the English Formulaic Familiarity List for Japanese EFL learners by collecting ratings data from tertiary-level students in Japan. A limitation of the study, however, was that the reliability of the data (i.e., whether the results are stable and consistent) was not evaluated and that each participant answered for only the smaller number of items in the subsets instead of the whole formula list. The present study was designed to overcome the limitation above to evaluate the reliability of the database. The participants were fresh and sophomore undergraduate students (N = 120). They completed the online questionnaires in which they were asked to rate the familiarity of each formula (i.e., to what extent they feel they see and hear each item) in seven-point Likert scale, whose formula list, instruction, and format was identical to the one implemented at Isobe et al. (2016) except the online platform. The questionnaires were completed incrementally throughout the semester and all the participants rated all the formulae. It was revealed that there was a strongly statistically significant positive correlation ($r = .92$; $p = .00$) between the mean scores of formulaic familiarity produced in this study and the ones in Isobe and colleagues' (2016) study, indicating their solid reliability.
⑨ 10:00~10:25	久保田 佳克(仙台高等専門学校)	高専生の英語語彙サイズの縦断研究	経済のグローバル化が進む今日、エンジニアには英語によるコミュニケーション力が求められている。しかし、日本のエンジニアの一角を養成している高等専門学校(高専)の学生は、同年代の高校生や大学生と比較して英語力が弱いとされる。筆者の所属する高専では、過去3年間に全学年を対象に英語語彙サイズ測定テストを実施し、高専生の語彙サイズが学年を追ってどのように変化するかを調査した。その結果、3年生までの低学年では比較的順調に語彙サイズは伸びるものの、4年生以降の高学年において伸びが鈍ることが判明した。本発表では低学年と高学年の語彙サイズの変化を比較し、高専の英語教育カリキュラムの問題点をその改善方法について考察する。
⑩ 10:30~10:55	南部 匡彦(国際短期大学)	リスニング語彙指導における借用語の明示的指導の効果検証	本研究の目的は、リスニング指導において学習語彙の借用語(Loanwords)としての特性の明示的指導が語彙定着度に及ぼす影響を明らかにすることにある。リスニング学習においては、学習者の語彙サイズが主要な理解促進要因(Wang&Treffers-Daller, 2017)であり、高頻度2-3000語レベルの集中的な語彙習得がリスニングには不可欠であると言われる(Schmitt, 2013)。またそれらの語彙の約半数はL1環境下で借用語でもあるという指摘もされている(Daulton, 2008)。本発表では上記のレンジの高頻度語彙を(i)借用語と非借用語(ii)語彙の出現頻度(iii)学習者のL2語彙親密度で分類し、各々の語彙特性及び借用語の明示的指導の有無がもたらす語彙定着度を検証し、L1言語特性を積極的に援用した語彙指導のあり方について議論する。
⑪ 11:00~11:25	北野 マグダ(文教大学) 千葉 克裕(文教大学)	High-Frequency English Words Commonly Unknown to University Students in Japan: Implications for Secondary and Tertiary Education	Studies have found that students entering university in Japan have gaps in their knowledge of high frequency words, and that this is acting as an obstacle to English understanding and communication. However, there has been little research into which high-frequency words in particular they are missing, and whether secondary school educational materials have played a part in bringing this about. This study utilizes the New General Service List (NGSL) and compiles test, survey, and classroom activity data to determine which high-frequency words are most commonly unknown to students in one private university in the Kanto area. The resulting list is then compared to the words appearing in Japanese junior high school English textbooks as well as in selected high school English I textbooks. The authors make recommendations for words that should be added to secondary school educational materials, as well as recommendations for further emphasis of words that have been introduced in junior and senior high school yet have not been well learned. In addition to acting as a road map for materials publishers in Japan, this list can also support current university instructors in helping students to learn words whose lack may be hindering their comprehension of English.
⑫ 11:30~11:55	高波 幸代(東洋大学)	スペリングテストの難易度を決定する要因は何か	高波(2018)では、スペリングテストにおける「書き取り」と「多肢選択式(和訳あり・和訳なし)」の2種3形式に注目して調査を行ったところ、書き取り形式の正答は半数に満たなかったが、多肢選択式では2形式ともに正答率が高いという結果が得られた。しかし、多肢選択式のテスト間では項目難易度に差が見られていたため、本研究では調査データを追加し、項目難易度、単語の特徴、質問紙、をもとに再検証を行うこととした。単語の特徴としては、(a)発音のしやすさ、(b)綴りの規則性、(c)品詞の特定しやすさ、(d)文字の長さ、(e)なじみ度合い、(f)意味の分かりやすさ、そして(g)頻度、の要素を加えて「単語の覚えやすさ」とし、-10から10で数値化して分析に使用した。正答率と項目難易度、単語の特徴、質問紙の情報から考察し、スペリングテストの難易度を決定する要因をまとめる。

8月18日(日) 第17室(50周年記念会館2階第2会議室)【語彙】

時間帯	発表者	発表タイトル	発表要旨
⑧ 9:30~9:55	関根 貴則(筑波大学大学院)	同義語が関連語学習にもたらす効果の検証	語彙は4技能の基礎となるため、効率的な語彙学習は学習者にとって必須である。語彙の学習方法の1つに「関連語」を用いた語彙学習が挙げられる。関連語とは、対象語と意味的に関連がある語彙(例 対義語、同義語)を指す。先行研究(Kasahara, 2015)では、既知語である関連語を対象語と同時に学習することで語彙学習に正の効果があった。関連語の中でも、同義語は対象語と意味が非常に近く学習する際にアクセスしやすいため、関連語学習に有用である。しかし関連語のコロケーション等を用いた研究はあるものの、直接的に同義語を用いた語彙学習を検証した研究は少ない。本研究では、関連語学習における同義語のはたらきを調査した。実験では、学習者に同義語を語彙学習の手がかりとして提示し、目標語の定着を複数の語彙テストにより測定した。結果より、同義語が意味の学習・保持に与える効果について示唆が得られた。
⑨ 10:00~10:25	小山 敏子(大阪大谷大学) 山西 博之(中央大学)	英語辞書利用状況の変化—検定教科書の改訂をうけて—	現行の「中学校学習指導要領」が2012年度から完全実施され、検定教科書も改訂が行われた。現行のものから、辞書使用に関しては「辞書の使い方に慣れ、活用できるようにすること。」という一歩踏み込んだ内容が記載されたことを受けて、教科書(中学校英語)には、辞書指導のためのページが設定されている。その教科書で英語を学習した生徒たちが2018年度に大学生になった。本調査では、健康スポーツ科学系の学部に入直後の学生を対象に、2015年度から2018年度までの4年間に亘り、1)保有している辞書の形態、2)英文を「読む」「書く」ときの辞書の利用状況、3)スマホの所持率、4)辞書アプリの利用状況などを尋ねた。そして、特に改訂教科書を使用した2018年度入学生と、それまでの学生とでどのような変化が見られたかを報告したい。
⑩ 10:30~10:55	鬼田 崇作(広島大学)	日本人英語学習者の視覚的単語認知における語彙競合—SOAおよび音韻的隣接語による影響—	第一言語の視覚的単語認知においては、形態的に類似する複数の語彙表象が活性化され、互いに競合する「語彙競合」という現象が起こるとされる。先行研究では、マスク下のプライミング法による語彙性判断課題において、ターゲットとプライムが形態的に類似する実験条件の反応時間は、両者が類似しない統制条件の反応時間よりも遅くなることが示されており、これが語彙競合の証左とされる。本研究は、日本人英語学習者の視覚的英単語認知においても語彙競合が起こるか否かを調査する。実験1では、プライムが提示されてからターゲットが提示されるまでの時間間隔が異なる条件を複数設け、実験条件と統制条件の語彙性判断課題における反応時間を比較した。実験2では、プライムとターゲットが形態的および音韻的に類似する実験条件を設け、類似しない統制条件の反応時間と比較した。実験の結果、日本人英語学習者の英単語認知においても語彙競合反応が得られた。
⑪ 11:00~11:25	岡田 龍平(筑波大学)	意味的重複に基づく多義語の付随的語彙学習の検証—LSAを活用して—	文章の読解を通して多義語を付随的に学習する際、その語の中心となる意味から離れた語義は文脈からの推測が困難である。しかし、多義語の高頻度の意味と低頻度の意味との意味的重複(semantic overlap)や、目標語と提示文脈との意味的関連度などの要因により、語彙の習得は促進される。本研究では、潜在意味解析(Latent Semantic Analysis)に基づいて作成した目標語との意味的関連度が高い文脈を用いた多義語の学習に焦点を当て、多義語の持つ高/低頻度の意味のoverlapという観点から実験を行い、それらの意味的な要素が多義語の習得に与える影響を調査した。実験では協力者に付随的語彙学習タスクを課した後に直後/遅延の語彙テストを実施して語彙の定着度を調査し、学習者の語彙/読解熟達度を考慮に入れて分析を行った。結果をもとに、多義語を中心とした語彙の指導の進め方について提案する。
⑫ 11:30~11:55	神村 幸蔵(筑波大学大学院・日本学術振興会特別研究員)	形態素・文脈情報が英語学習者の語意推測とその記憶保持に与える影響	学習者は英文読解中に意味を知らない語(未知語)と出会った際、語形情報(i.e., 形態素)や文脈情報などの手がかりを用いて未知語の意味を推測する。本研究では、推測中に利用されるこれらの手がかり(形態素・文脈情報)が推測の成功とそれに付随する語意の記憶保持にどのように影響を与えるかを検証した。実験マテリアルとして、推測の手がかりとなる未知語中の形態素(接頭辞:既知/未知)と文脈情報(推測に有益である/ない)を操作し、未知語推測タスクを作成した。実験では、日本人大学生がこの推測タスクと英語熟達度テスト(語彙サイズ・読解熟達度)に取り組んだ。結果から、推測プロセスの初期段階において利用可能な手がかり、学習者の英語熟達度の影響、および推測された意味の保持について示唆が得られた。本発表では、語意推測のプロセスを踏まえた手がかりの活用や推測を通じた付随的語彙学習に関する教育的示唆について議論する。

8月18日(日) 第18室(50周年記念会館2階岩木ホール)【早期英語教育/言語政策・教育制度】

時間帯	発表者	発表タイトル	発表要旨
⑧ 9:30~9:55	高瀬 敦子(関西学院大学(非))	文法学習を容易にする小学生の多読多聴	小学生に英語を導入する場合、読み聴かせと多読多聴を大量に行うのが、効率よく文法を習得できると考える(高瀬、2017)。現在大学では、中学・高校の6年間で多大な時間を費やした文法学習にも拘らず、文法に対して苦手意識を持つ学生、アウトプット時に文法無視をする学生、英語運用能力が低い学生等が目立つ。これは、中高時代の文法学習が文法問題を解くための学習となっており、言語習得には余り功を奏しなかったのではないかと思われる。これらの大学生に多読指導を行った結果、様々な分野の伸びに加えて文法能力も伸びた(Yoshizawa, Takase & Otsuki, 2017)。ここでは、小学4・5年生5名に対し、絵本の読み聴かせ、および大量の多読・多聴(150~250冊)を中心とした指導を行い、それを持続しつつ、6年から文法指導を開始した結果、様々な文法項目を容易に学習していった様子を発表する。
⑨ 10:00~10:25	早瀬 沙織(東京大学大学院生)	韓国の小学校英語教育における教科書の変化	日本では2020年度から、小学5、6年生が「教科」として英語教育が実施される予定である。2020年度の全面実施に向けて、昨年度から移行期間として、新教材の中学年用のLet's Try!、高学年用のWe Can!が導入されている。そのような中、韓国でも日本の学習指導要領に相当する教育課程が、2015年に改訂され、段階的に導入されている。2018年度には、小学3、4年生の教科書が新しいものへとなり、今年度の2019年度に小学5、6年生の教科書が新しいものへと改訂された。これまで筆者の行ってきた教科書分析も踏まえ、韓国の小学5、6年生の教科書はどのように変化をしているのか明らかにする。また、今後の日本の小学校英語教育を考える上で検討すべき点についても考察する。
⑩ 10:30~10:55	浅野 享三(南山大学外国語学部)	新時代の外国語(英語)教育	「次の次」の学習指導要領改訂時を念頭に置き、新時代の外国語(英語)教育の在り方について新科目設置という視点で検討する。主な理由は、1. 少子高齢化の深刻化、2. 在留外国人の増加、及び3. 革新技術の進化である。諸統計は2048年頃に総人口が1億人を割り、2060年には10人に4人が高齢者となると予測する。統計を取り始めて以来の少子化が、深刻な働き手不足を起し、外国人に頼る時代が到来する。その一方で、第4次産業革命とまで言われる革新技術時代は、労働者不足を補いながら、働き方・暮らし方を根本から変える。あまりに長い間、学校外国語(英語)教育は、周囲の関心をコミュニケーション力育成に引きつけ過ぎた感がある。「次の次」の頃までに、外国語科はコミュニケーション系科目を減らして、例えば「日本語教育」「言語と文化」「通訳翻訳」科目を新設し、外国人と共に豊かで平和な生活を送れる市民育成に貢献すべきである。
⑪ 11:00~11:25	藤林 富郎(関西外国語大学短期大学部)	Anatomy of K.G.C. English Language Education	Kansai Gaidai College(K.G.C.), where I work, receives 100% enrollment every year in spite of the fact that the population of 18-year-old's in Japan is constantly decreasing, and so many colleges and universities are unable to get 100% enrollment in recent years. It shows for high school students K.G.C. is good enough to choose to continue their study and seek their future career. In this presentation, I'd like to analyze what makes the college so attractive to high school students. In this analysis, history, curriculum, faculty, teaching system, a variety of study abroad programs, overseas partners, organization, other inside and outside surrounding factors, and outcome, as well as admission policy, curriculum policy, and diploma policy will be discussed, along with the two founding principles: 1) Nurturing individuals with a well-rounded education who can contribute to the international community; and 2) Focusing on practical learning in order to meet the changing social needs and viewing the world from a fair-minded perspective. The underlying philosophy of "Students First" and "Never Stop Improving" have to be noted here, too. Also, the future of primary, secondary, and tertiary education must be discussed along with the future of this college. In other words, we are thinking of further improving the college so that students will continue to enroll in the college through the coming decades. At the end of the presentation, I welcome the audience to share their thoughts and ideas with me and each other. Thank you.
⑫ 11:30~11:55	飯島 睦美(群馬大学)	小学校3年生におけるローマ字学習一難しさを抱える学習者の視点から	小学3年生国語でのローマ字学習は、1947年に文部省が「ローマ字教育の指針」を定めて以降変化しながらも継続されている。今日、小学校情報科目でのローマ字入力でその意義が強調されるが、実際は各パソコンメーカーには独自の入力システムがあり必ずしも一致しない。小学校3年で外国語活動以外で、ローマ字、情報科目でアルファベットと出会い、日本語では表出しなかった読み書きの難しさに直面し、学ぶ意欲を削がれる児童が少なからず存在する。ローマ字という表記システムが導入されてから約1世紀経った今日は当然当時とは状況が全く違う。小学校での英語教育が本格的に開始される今、きちんと議論されるべきではないだろうか。本発表では、ローマ字学習の意義と方法について問い、その学習に困難を感じていた小学校3年生の男児への指導と2年後の本児の英語学習の様子を報告し、小学校3年生でのローマ字学習について提言するものである。